



芳町の中でも深い歴史と豊かな自然、強くて優しい人とのつながりがある場所、竹間沢。その地域を大切に想い、ただひたむきに向き合う人たちがいます。

―竹間沢農地環境保全協議会―
会長を務める池上正信さん（69）は狭山市に生まれ、今から35年前、結婚を機に初めて三芳町の地を踏みました。三芳町にきて初めてホタルを見た池上さん。ホタル育成の環境整備や、使われていない農地に麦や菜の花を植え、地域の人に自由に摘み取ってもらう活動を行っています。それらの活動が認められ、今年の4月、埼玉県多面的機能支援推進会議（県・関係農業団体・関係市町村の60団体で構成された組織）で表彰を受けました。

コスモスに込められた地域への想い

「竹間沢で農業を続けている農家が減少し、農地の80%ほどが空いてしまっています。畑も手を入れないと腐れてしまうんです」と語る池上さんは、8年前、遊休農地に麦や菜の花を植える活動を始めました。「昔は、自分も人参や里芋、カブ等を作っていたけれど、辞めてしまいました。後継者がおらず、自分たち夫婦だけではとてもやっていけないと感じたんです」。

池上さんは自分の畑にも毎年菜の花や、コスモスを植えています。これらの花は、風よけや土埃が舞うのを防ぐと共に、地域の人々の目を楽しませてくれます。「花が好きなんですか？」となにげなく尋ねると、はにかんだ笑顔を見せてくれた池上さん。辺り一面を埋め尽くす絨毯のような花々は、見て楽しみ、摘んで楽しみ、地域の人々の思い出とつながりを深めています。

「自分も三芳町に来た時に近所の人にお世話になった。その人たちの子どもの世代になって後継者がいない中、助けてもらった分、恩返しをしたい」という池上さん。

今後の展望を聞くと、先日、畑を使いたいと手を挙げる町内の人がいて嬉しかった、というエピソードを交えながら、地域で竹間沢を守り続けてほしいです。と、農作業で硬くなった手を重ねて語りました。

竹間沢を照らすホタルの光

池上さんは、竹間沢ほたる育成会のメンバーとしても、以前から自宅



①自宅のビオトープで想いを語る池上正信さん。この時期の夜になると、ホタルの光が優しく舞う。②池上さんの自宅で自生しているカワニナ。巻貝の一種で、ホタルのえさになる。きれいな水でしか生きられない。③④カワニナが自生している池上さん宅の小川。井戸水をひいているためか、透き通り、ひんやりとしている。⑤遊休農地を利用して植えられたコスモス。辺り一面がピンクに染まり、地域の人々の心を和ませてくれる。⑥⑦竹間沢農地環境保全協議会によって植えられた菜の花。風を防ぎ、土埃を舞わせないという工夫とともに、地域の人たちの目も楽しませている。専用の旗が立っているところでは、自由に若芽を摘むことができ、毎年人気のスポットとなっている。



竹間沢農地環境保全協議会

環境を守り
地域を想い
未来につなぎたい

竹間沢の農地に広がる菜の花やコスモス、そこには見る人に伝えたい想いがありました。

写真：会長の池上正信さん。竹間沢ほたる育成会のメンバーでもある。ホタルも飛ぶ自宅庭園の前で。

でホタルとホタルのえさとなるカワニナの育成に携わってきました。「最初はホタルが本当に飛ぶのか不安でした」と語る池上さん。挫折を味わいながらも、県外に視察に行くなど、学び、工夫を加え、何度もあきらめず、成功するために向き合い続けました。今では、ホタルとカワニナが自生し、毎年、幻想的な光が池上さんの庭を照らします。

未来に願うもの

「こぶしの里でも、ホタルやカワニナが自生するような環境を作り、ホタルが人の手を加えなくても循環して生息してくれたらいい。私の庭で出来たのだから、必ずできると信じています」と、目尻をくしゃっとさせながら無邪気な笑顔で語りました。

竹間沢農地環境保全協議会

平成19年に設立。竹間沢農家組合・竹間沢第一区・竹間沢ほたる育成会で構成。遊休農地に麦や菜の花などを栽培し農地景観の向上に努めるとともに、こぶしの里でホタルの保護育成活動に取り組んでいる。今年4月、農家を中心となって地域活動を行っている組織として269組中8組の1つに選ばれ、表彰された。